

Title	ギュンター・グラス『広い野原』を読み解く：文学による歴史の相対化
Sub Title	Zur Deutung des Romans Ein weites Feld von Günter Grass : Relativierung der Geschichte durch die Literatur
Author	大羽, 武(Oba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.125(288)- 142(271)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ギュンター・グラス『広い野原』 を読み解く

—文学による歴史の相対化—

大羽 武

1999年12月10日、ギュンター・グラスにノーベル文学賞が贈られた。「グラスは生き生きとした暗い寓話で歴史の忘れ去られた側面を描き出した。『ブリキの太鼓』は20世紀の、永久に残る文学作品の一つに数えられよう」というのがスウェーデン・アカデミーが明らかにした授賞理由である。『ブリキの太鼓』(1959)は彼の代表作品であるが、「歴史の忘れられた側面を描き出した」のは何も『ブリキの太鼓』だけではなく、彼の小説のすべてがそうであると言っても過言ではない。特に少年の眼から第二次世界大戦当時のダンツィヒを描いた『犬の年』と『猫と鼠』、石器時代から現代までを歴史の背後にいる女性に焦点を当てて描いた『ひらめ』、ねずみが人類の自己破滅を警告する『女ねずみ』、テオドール・フォンターネを復活させ現代ドイツの150年を描いた『広い野原』⁽¹⁾などには、『ブリキの太鼓』と同様にいずれも「歴史の忘れられた側面」が描かれており、歴史はグラス文学の本質的な基盤である。ただ彼の描く歴史が「忘れられた側面」であるため、「従来の歴史」が意識の中で習性化されている多くの読者の間に激しい反対感情を呼び起こすことにもなる。換言すれば、「忘れられた側面」は描写されない限り、それらの人々の意識の中では永遠に忘れられたままであり続けるのだ。

『広い野原』(1995年8月28日)出版前の文芸批評家、政治家、マスコミの反応、8月21日付け「シュピーゲル」34号の表紙を飾ったマルセル・ライヒ＝ラニツキによる本書の引き裂き、及び24日のドイツ第二テレビ「文学カルテット」での「グラスに対する殺意と紙一重の憎しみ」⁽²⁾を感じさ

せる攻撃は、常軌を逸したものである。西側の自分たちに対立するもう一つの国家が「破産」し、高揚した勝利者感情と陶醉感に満たされた政治的、社会的エリートたちは『広い野原』に描かれたグラスの歴史観を攻撃し、一般読者が独自の読書体験をする前に、この書を読むに値しない、無価値なものと断罪したのである。このような、あたかも「一人の人物を、あるいは一つの作品を、できるだけ見事に撃ち落とすために、高く投げ上げるクレー射撃」⁽³⁾のような攻撃は、内外の良識ある人々に、まさに第三帝国時代のナチスの指導者原理の再来を印象づけるものであった。これに対しグラス文学の専門家フォルカー・ノイハウスは、「グラスのような作家の仕掛けを見破るためには、正確に読み、彼と会話し、そして彼が提供した対話の糸を紡ぎ続けて行かなければならない」(N,229)と主張し、フォンターネの作品と伝記、さらにビスマルクとニーチェの作品を机上に置いて『広い野原』を多くの時間をかけて読むヴァルター・イェンスの読書法を推奨する。確かに『広い野原』には、一筋縄では理解し難いさまざまな仕掛けが施されている。

本論は、「歴史の忘れられた側面」が『広い野原』にどのような仕掛けで描写されているか考察したものである。

I 壁の崩壊から通貨統合

『広い野原』は、テオドール・フォンターネを愛読する妻のウーテに刺激され1986年以来インドで抱いていた、フォンターネに関する作品を書くという本来のグラスのぼんやりした構想がベルリンの壁の崩壊という歴史的事件によって目標と方向を与えられ、一気に具体化した作品である。作品では壁崩壊後の1989年12月から通貨統合、再統一、信託公社による清算、フリードリヒ大王親子の遺骸のポツダムへの移送を経て1991年10月までの、およそ1年10カ月の間に、1848年の革命から現代までのドイツ歴史の150年が回顧される。それを可能にするのが、フォンターネの生誕からちょうど100年後の1919年12月30日にノイルピーンで生まれ、ポツダムのフォンターネ文書館の誰よりもフォンターネに精通し、フォンターネ風の

雑談口調でその著作や手紙から自由自在に引用する、通称フォンティと呼ばれる主人公テオ・ヴトゥケであり、彼に四六時中付きまとう、彼と同じ年の3月23日に生まれた「昼夜の影」ホーフタラーである。ホーフタラーもハンス・ヨアヒム・シェートリヒの『タルホフナー』⁽⁴⁾の主人公が、死ぬべき動機がないとして、グラスによって永遠のスパイとして復活させられたのである。この創案された「不死の二人」によって適宜過去を呼び出し、現在と比較しながら、初めて再統一後のドイツを現代ドイツの150年の中に位置づけることが可能になったのである。ホーフタラーはプロシアからドイツ第二帝国、ナチスの第三帝国、ドイツ民主共和国に至るまでスパイ警察の情報提供者、ゲシュタポ、シュタージの協力者としてその都度国家権力に奉仕しながら生き延びる。彼は仕事柄、フォンターネの運命にもフォンティの運命にも精通している。何故フォンターネの生まれ変わりとして永遠のスパイが離れられない関係になったのか、グラスはその理由を入念に準備する。スパイとしてやり残した事件の一つがフォンティに関する事で、ホーフタラーはフォンティの青春時代の過ちやベルリンの壁の建設前から西ドイツにいてスパイを働いているフォンティの息子のことでフォンティを監視し、脅迫し、自分の意志を押しつけるのである。その反面彼は第二次世界大戦中はフォンティに危険でない戦時レポーターの仕事、東ドイツ時代には旧帝国航空省での書類運搬の仕事を世話をやったり、神経熱で病床にあるフォンティを看病したりして、援助の手を差し伸べるのである。フォンティはホーフタラーから自由になれない。それ故、彼は突然水に潜って姿を消し、予測できない所に姿を現すカムフライツプリーに自己投影し心を奪われるのである。

「ママ（フォンティの妻、筆者注）はもちろん涙が溢れてきただろう、一方私には、どうしても大きい存在になろうとするこのような出来事は本当に少しも意味を持たないんだ。（…）」（G13,10f.）。これがベルリンの壁の崩壊直後、東ドイツの文化同盟の講演旅行者であったフォンティの壁の崩壊に対する最初の見解である。状況は迅速に再統一へと向って進んでいく。彼はホーフタラーと共に頻繁に過去を呼び出し、現在と比較する。大

晦日、ブランデン門を取り囲んだ群衆がドイツ国歌を歌った。穏やかな第三節に続いて、戦後、帝国主義的内容だと禁止されていた第一節 „Deutschland, Deutschland über alles ...“ (世界に冠たるドイツ…) が歌われた。フォンティは「幸せの証」に反対しようとしたが、常に体制側にいるホーフタラーは涙を流しながら大声で歌う。通貨統合の7月1日が近づいてくる。ホーフタラーは言う。「今起こっていることは相変わらず当時と関係しているんだ。レーニンとその結果も。それにも拘わらず言うが、7月1日からは世界は別のように見えるだろう。私たちの生産物はその後は投げ捨てられるばかりとなろう。そして私たちの会社は西の人々が数カ月前から言っているように、スクラップとなろう。ロストックからカール・マルクス・シュタットまで、一つのスクラップの山となろう」(G13,136)。フォンティは言う。「だが、まず最初に自由がやってくる。そのにおいを嗅ぐと肉食獣の臭いだ」(G13,138)。「私たちはライブツィヒやその他の所で、この子供のようなわめき声〈我々が国民だ〉(Wir sind das Volk)に代わった言葉〈我々は一つの国民だ〉(Wir sind ein Volk)によってひとつまみの胡椒をかけられるのではないかと心配していたんだ。その通り、一つの国民だ。いずれにしてもこのようにシュプレヒコールで統一が叫ばれた。そして統一がやってきた。全然他のようにはならなかった。しかしまずやってきたのは、そうでなければならぬから、お金だった」(G13,140)。通貨統合の日。60歳以上の人は6千マルクまで60歳未満の人は4千マルクまで1対1のレートで、それ以上は2対1のレートで東ドイツマルクを西ドイツマルクに交換できる、東ドイツの人々にとっては待ちに待った日である。フォンティにとってはこれまで稼いできたお金は東が生産する限定的な品物に対して十分だったし、その上預金さえできていた。彼は叫ぶ。「1対1は正しい、しかし、私たちの古いグロッシェンが半分にされるのは間違いだ」(G13,161)。通貨統合は西の商品を購入したいという、東の人々の消費欲求を迅速に満たし、お金は再び西へ戻っていく。

II 通貨統合からマルタの結婚式

娘のマルタ（38歳）と妻を癌で亡くしたミュンスターの建設会社の社長グルントマン（56歳）の結婚式が行われる。この2人の年齢差は、ちょうど『エフィ・ブリースト』の20歳のエフィと38歳のインシュテッテンの年の差と同じく18である。「結婚式では東ドイツと西ドイツの考え方が、年齢的にそして性別的に、並びに職業的に幾重にも修正されて出会い、そして相互に補完し合い、あるいは批判し合い、相対化される」⁽⁵⁾のであるが、東西の人々の心の中には依然としてまだ壁があり、相互理解は成立し得ない。

III マルタの結婚式から再統一

シュヴェリーンに進出したグルントマンは経済学と生態学が共存する工業公園と保養公園を計画する。フォンティは1871年の泡沫会社乱立時代への回帰と捉え、ビスマルクと現代のビスマルクになろうとする連邦首相を比較し、2人とも大ペテン師と見なす。ユダヤ人のイエナ大学教授フロイントリヒの学問的業績を西側の教授たちが査定し、不必要な知識人として彼を追放しようと目論む。彼の2人の娘は公道でネオ・ナチの一団に侮辱される。「1870年と1871年がこれと同じだった。ドイツの統一はいつもにわか成金と卑しい者たちのものだ。ただ、当時は4番目の立場があった。つまり、労働者階級だ。あの時はまだ希望がその中にあった」(G13,411)。この気運の最中、フォンターネに関係づけられた、新しい要素が加わる。フォンティの孫娘マドレーヌが訪ねてくるのだ。彼女は22歳で、ソルボンヌ大学の修士課程でドイツ文学を専攻し、フォンターネを研究している。ドイツ再統一の日がやってくる。10月2日の夜、フォンティと妻のエミィ、マドレーヌ、ホーフタラーの4人はドイツ再統一の式典が行われる帝国議会前の広場へ行く。マドレーヌは「ドイツの統一について私はただこういうことが言えるだけです。ドイツ統一はフランス人の目から見れば、正常なことですわ、必ずしも願わしいことではありませんが、受け入れる

ことができます。祖父とは反対に、祖父はまったく異議を唱えています
が、私は統一を喜んでいます。私は、あなたも、マダム・ヴトゥケ、自分
を幸せだと思うことを期待しています。偉大な日だわ！」(G13,451)。式
典の最後に『歓喜に寄す』が熱狂的に歌われた。フォンティは歌わなかつ
た、それどころか怒りで唇が震えた。彼は言った。「あまりにもたくさん
の喜びが理性を失った」(G13,474)、さらにもっと大きな声で「この統一
祖国に私は殆ど期待していない」(G13,474)。

IV 信託公社と旧東ドイツ

当初『広い野原』のタイトルは『信託公社』(Treuhand)になるはず
であった。このことから明かなように、ドイツ再統一後、旧西ドイツ
の基準で旧東ドイツのすべての企業、官庁、組織、大学の教官と講座、不
動産などを「清算する」信託公社が取り扱われる第4部が作品の核心であ
る。そのクライマックスが信託公社初代長官の暗殺である。昨日まで保証
されていた数十万人もの人々の職場を一瞬にして奪う信託公社と長官は多
くの敵を作り、憎悪を解き放った。憎悪のあるところには暗殺の動機が明
白に存在するというのがその理由である。「信託公社は非難にさらされて
いる。信託公社は悪魔あるいは怪物と呼ばれた。すなわち、信託公社は情
け容赦なく民営化する。信託公社は植民地公社であり、議会の管理下にな
く、至る所で、特に出先機関で新旧のザイルパーティーの手荒い振る舞い
を知らせている。あっちこっちで西の強欲な不動産業者と東のオプティミ
ストたちが共同で行ったから、嘲笑的に〈全ドイツの闇取引〉といわれ
た」(G13,610f.)。信託公社はフランス革命時に恐怖政治を行った公安委
員会と比較される。西側からは民営化作業の立ち遅れのため経済再建が思
うように進捗していないと非難され、東側からは東の旧国営企業の再建よ
り民営化を優先するため多くの企業が倒産し、失業者が激増していると非
難される。実際には、信託公社の初代長官ローヴェグーはデュッセルドル
フの自宅の書斎にいたところを窓越しに射殺されたのであるが、グラスは
どのようにして暗殺が信託公社の建物の中で起こり得たか、文学的に次の

ように虚構する。長官はプロイセン的に時間通りに月曜日の朝早くベルリンに到着し、その週の金曜日の夕方まで仕事をし、最後の飛行機便でデュッセルドルフへ帰るのが習慣であったが、多忙なため彼はしばしば土曜日の夕方までベルリンに留まることがあった。坐り仕事のため運動不足と主治医に注意され、彼は深夜一人で建物の廊下をローラースケート靴を履いて滑り運動不足の解消に努める。そんなある夜、ローラースケート中の無防備の長官は何者かに暗殺される。長官は仕事柄必然的に多くの敵を作ったが、人間的には多くの共感を呼ぶ人物として描かれ、この人間的には魅力的な長官とは対照的に、彼の任命者であり、先頭に立って迅速な再統一を押し進めてきた連邦首相は、長官の偉大さが欠けているが故に軽蔑には値するが、憎悪には値しないと徹底的に批判される。公安当局は暗殺犯のモンタージュ写真さえ作成できず、今日に至るまで事件は未解決のままである。この実際に起り、迷宮入りしている暗殺事件をグラスは、信託公社による「東側」の情け容赦ない清算がその原因であるとして文学的に虚構したのである。世間は赤軍派の犯行ではないかと推測するが、フォンティは、犯人を夫が清算によって失業した、信託公社の建物の掃除婦の一人に違いないと推測する。フォンティが犯人と推測した掃除婦は30代半ばの、花の植木鉢でフォンティの部屋を飾ってくれる、ごく普通の心優しい女性である。それでもって信託公社の清算がいかに非人間的で、残酷であるか、そしてそれによって失業した人の憎しみがいかに大きいのか、ということが暗に強調される。どこにでもいるような女性、それだけいっそう容易に潜伏することもできる。この事件後、フォンティは当局から、「失業者」(Arbeitslose)よりも同じ意味の「解放された人々」(freigestellte Kräfte)の方が寛大に、肯定的に響くように、「清算する」に代わる、もっと「適切な、そして同時に慈善心に富む、無愛想でない、あるいは全然反感を起こさせない、むしろ快い響きの新しい言葉」(G13,644f.)を探すよう命じられる。彼は長い間探し求めた挙げ句、部屋を植木鉢で飾ってくれる掃除婦からヒントを得て、„umtopfen“ (他の鉢に植え替える)という言葉を得た。が、彼は国有財産から取り出して、民営の鉢に植え替える

にしても、結局は「清算する」に変わりはないのだと考える。

この第4部にはもう一つドイツ史にとって見落とせない事件がある。フォンティの友人でユダヤ人のイエナ大学教授フロイントリヒの自殺である。彼の妻はフォンティにそのことを手紙で知らせてきた。「夫はもはやこれ以上生きたくなかったのです。彼は私に娘たちの跡を追ってイスラエルへ行くよう願いました。私は彼が最近繰り返し確認した〈ユダヤ人のための居場所はここにはない〉に残念ながら同意せざるを得ませんので、私はおそらく彼の頼みに従うでしょう…」(G13,662)。彼の自殺の原因も、根源には東西ドイツを問わず存在する反ユダヤ主義があるのであるが、直接的には西側の査定と清算による言語に絶する苦悩の結果である。

フォンティとホーフタラーは旧東ドイツをドライブし、至る所で悲惨な現場、石炭の露天掘り、ボロボロの城、木々が損傷を受けた公園など、悲劇的で、残酷で、荒涼とした「深淵」を確認する。2人の会話から、「清算」に対するフォンティの心情が具体的に明らかになる。「しかし、その露天掘りはまだ活動していた。(…)突然、人の声がし、(…)ベルトコンベアーが動き出した。(…)あたかもその動きは他の所では静寂だけを目論んでいた時代精神に逆らおうとしているかのようであった。あたかもその声は『私たちは採掘を続けるんだ！ 私たちは清算されないんだ！ 私たちをペチャンコにするな！』と主張しているかのようであった」(G13,514)。「その通りだ！ 最後には至る所がこのように見えるんだ。一国家の破産、終着駅だ！」(G13,517)。「向こうの人たちは私たちを破産させた。不思議ではない！ 彼らはテンポを指示した、私たちは歩調を合わせなければならなかった」(G13,517)。外国人敵視が激しくなる。フォンティはティーアガルテンでトルコ人と間違われ脅されそうになる。

フォンティは信託公社の初代長官の暗殺からわずか2週間後に任命された新長官に受け入れられず、外勤を命じられ1週間後に部屋を明け渡さなければならなくなる。「ここに居場所がないのはユダヤ人ばかりではない」(G13,662)と彼は言う。

V 再統一からフリードリヒ大王の遺骸の帰還

ユダヤ人ばかりでなく、自分の居場所もないと多くの人に手紙を書いて、フォンティはイギリスへ立ち去る決心をする。マドレーヌ宛の手紙で彼はこう言っている。「ああ、お前、私のまわりは空っぽになってしまった。ここではもはや何も彼を（フロイントリヒ教授、筆者注）支えてやることができないんだ。私もちょうど立ち去ろうとしているところなんだ。すべてが私にこう言うのだ。《いつの時代にもブーヘンヴァルトがヴァイマルの近くにある国からは出ていく以外に何も無いのだ。この国はもはや私の国ではない、あるいは私の国であってはならない、この国にはあまりにも私を繋ぎ止めるものがないんだ。》」(G13,671)。フォンティはティーアガルテンでネオナチの4人組にユダヤ人と間違われ脅される。彼はテゲル飛行場から飛び立つ寸前、ホーフタラーに連れ戻される。グルントマンは自動車事故に遭い亡くなる。1991年8月、フリードリヒ大王親子の石棺が特別列車でポツダムへ移送され、サンスーシー宮殿に埋葬される。ドイツ軍国主義の象徴ともみなされるフリードリヒ大王の生前の願いが叶えられ、これによってドイツ再統一は形の上では一段落する。フォンティはこの式典見物から帰る途中、路上で演じられるパントマイムを見物する。それはフリードリヒ一世の命令で斬首刑に処せられたフリードリヒ大王の皇太子時代の友人カッテの悲劇を演じていた。特別列車でポツダムへ戻ってきた大王親子と大八車で運ばれるカッテの対照的な光景である。プロイセン・ドイツの栄光と悲慘を象徴する一光景である。

ホーフタラーはフンボルト大学の語学集中コースでスペイン語を学び始める。フォンティはカルチャー・センター（Kulturbrauerei）でフォンターネ時代から現代までの総決算として最後の講演を行う。「これらすべては、そしてもっと多くが、今や信託公社の支配下にある。これらすべてが、お城が次から次へと信託公社の命令で投げ売りされ、もはや国民の財産であることが許されないのだ。信託公社がそれをやっているのだ！」(G13, 750)。フォンティの講演と並行して信託公社では1000回目の清算が

祝福される。ここでもう一度信託公社に対する憎しみの結果として一つの事件が虚構される。信託公社の自動循環式エレベーターが燃えるボヤ騒ぎが勃発するのである。フォンティもホーフタラーも姿を消す。フォンティから文書館に絵葉書が届き、マドレーヌと一緒に彼女が遺産として相続した一軒家がある南仏のセヴェンヌ山地に行ったことがわかる。

このように壁の崩壊直後フォンティが吐露した再統一によって拡大されるドイツに対する危惧が現実になったのであるが、この作品のモチーフを実現可能にしたのは外ならぬ「不死のフォンターネ」ことフォンティである。すでに1871年のドイツ統一、今世紀の二度の世界大戦及び東ドイツ時代を体験しているからこそ悲劇の象徴であった壁の崩壊にあたって、大多数、いや殆どすべてのドイツ人が歓喜し熱狂したにもかかわらず、彼は即座に危惧の念を吐露することができたのである。グラスは『テルクテの出会い』で実証済みの独学で獲得した専門家も舌を巻く程の深い正確な知識でもって、フォンターネの作品、日記、手紙などから自由自在にフォンターネ風の雑談口調で引用したり、時には小説の登場人物たちの言語的特徴からフォンターネ風とみなされる慣用語句さえ創作しながら (Vgl. N, 218), 過去を呼び出し、現在と比較するのである。そのグラスの歴史認識は『テルクテの出会い』の冒頭の言葉に表れている。「未来にあったことは過去にもあるだろう。今日の我々の出来事は現在起こったことである必要はない。この出来事は300年以上も前に始まった。他の出来事もそうだ。ドイツで起こるどんな出来事もそのように長い由来を持つ」(G9,7)。これを『広い野原』に当てはめれば、再統一後の信託公社の清算を初めとする、旧東ドイツの迅速な西側化によってもたらされるさまざまな問題は何も今始まったことではなく、すでにそうなるべき長い歴史があるのであり、その歴史的由来を150年前から明らかにする、というのが作品執筆のモチーフである。このモチーフに沿ってフォンティが創案され、彼の相棒としてホーフタラーが永遠のスパイとして復活したのであるが、この長いストーリーを紡ぎ、最後にそのストーリーに鮮やかな結末をつけ、一つのまとまった作品に仕上げるのが『エフィ・ブリースト』から借用し

た、ブリーストの口癖 „ein weites Feld“ である。

この „ein weites Feld“ は、表題にも用いられ、作品中にも合計10回用いられる最も重要なキーワードである。それ故、まず『広い野原』の „ein weites Feld“ の考察に入る前に、『エフィ・ブリースト』におけるこの語の意味を確認しておきたい。

VI „ein weites Feld“

『エフィ・ブリースト』では、娘エフィとインシュテッテンの結婚式の翌日、ブリーストが妻ルイーゼとの会話の中でこの表現を初めて用いる。この会話の根底には夫妻の、新婚夫婦の将来に対するぼんやりとした不安が横たわっているのである。ルイーゼの「誰でも奥さんを苦しめるものですよ。それに美術狂というのはまだまだましな方ですよ」⁽⁶⁾という発言に対し、ブリーストは次のように応える。„Nein, gewiß nicht; jedenfalls wollen wir darüber nicht streiten; es ist ein weites Feld. [...]“ (Th3,38) (そうだね、確かにそうだ。とにかくそれについて議論するのは止めよう。その問題は広すぎて論じ始めたらなかなか決着がつかないことだからね)。『エフィ・ブリースト』では、このような表現はブリーストによって6回、インシュテッテンによって1回、合計7回用いられる。いずれも問題解決を延期する慣用的表現であり、ブリーストの性格を特徴づける言葉である。インシュテッテンの1回も、岳父のこの口癖を意識的に持ち出し、話題の転換を図ったものである。小説の最後もブリーストのこの言葉で終わる。インシュテッテンとエフィの結婚生活が破綻し、エフィが亡くなった後、娘の死の責任は親である自分たちにあるのではないかと、妻ルイーゼは思う。「私たちは娘の躰を間違ったのではないのでしょうか。ほかならぬ私たちがです。何故と言って、もともとニーマイヤーはゼロと同じなんですわ。何でもかんでも疑いっぱなしにしておくんですもの。それから、ブリースト、大変残念なんですけど…あなたの絶え間ないどっちつかずの曖昧さ…それから最後に私が責任を感じているのは、だってこの件では自分だけ責任がないなどと言う気はありませんから、やっぱりあの子はあんま

り若すぎたのではないかと思うんです」(Th3,301)。これに対してブリストはこれまでと同様に „Ach, Luise, laß ... das ist ein *zu* weites Feld.“ (Th3,301) (なんだね、ルイーゼ、止めなさい…それは広すぎて論じ始めたらなかなか決着がつかないことだよ) と応えるのである。勤勉で規律と倫理を重んじ出世至上主義の、厳格なプロイセン・ドイツの代表インシュテッテンと、何事にも深く立ち入らず、批判的にならず、すべてを鷹揚に受け入れ、社会に順応し、問題解決を延期していくブリストの狭間で自然児のように愛らしいエフィの魅力がいつそう際立つ作品である。

【広い野原】では、„ein weites Feld“ あるいは „ein *zu* weites Feld“ のような表現は、フォンティによって6回、ホーフタラーによって3回、フロイントリヒ教授によって1回、合計10回用いられる。たとえば、フォンターネ時代や現代についてホーフタラーと交わす会話の中でフォンティは次のように言う。„Das ist alles furchtbar richtig. Aber was richtig ist, muß nicht wahr sein. Die Wahrheit ist ein weites Feld.“ (G13,140) (あれもこれもすべてまったく正しいと思うよ。しかし、正しいことは必ずしも真実だとは限らない。真実とはあまりに広すぎて論じ始めたらなかなか決着がつかないことだよ)。この用法は、問題に立ち入って決着をつけることを回避する、まったくブリストと同じである。このようにフォンティはブリストの言い回しを用いて問題解決を延期していくのであるが、ここにはブリストにはない、「不死のフォンターネ」としてのフォンティの特徴が表れてもいる。「正しいことは必ずしも真実だとは限らない」という断定的な意見は、何事にも批判的にならず、すべてを鷹揚に受け入れていく優柔不断なブリストには絶対に吐けないであろう。これはやはり長い歴史を体験してきた者が初めて口にすることができる「真理」である。また、フォンティはマルタの結婚式の披露宴で、„Alles furchtbar richtig! [...] Doch die Schuld ist ein weites Feld und die Einheit ein noch weiteres, [...]“ (G13,295) (何もかもまったく正しい！ だが罪というものは論じ始めたらなかなか決着がつかないことだよ、ドイツ統一問題はさらに広すぎて決着がつかないことだよ…)、とブリストの言い回

しを用いてフリーデルの追求をかわす。

ホーフタラーの „ein weites Feld“ 発言 3 回及びフロイントリヒ教授の発言は、いずれもこの慣用語法の本来の所有者ブリーストという名前を持ち出してのものである。それでもって 2 人は問題解決を延期する優柔不断なブリーストとは性格的に無縁であることが証明される。それに対しフォンティはブリーストという名前を口に出さずにこの言い回しを用いる。何故なら、彼は「不死のフォンターネ」であるからだ。

このようにフォンティは重要な問題に対しその都度、ブリーストと同様に „ein weites Feld“ と発言し、問題解決を延期してきたのであるが、グラスは最後にブリーストの曖昧な態度は欺瞞であると断罪し、すでに統一を歴史的に体験したことのあるフォンティをブリーストから決別させる。「ほんの少しの幸せを私たちは見渡す限り人気のまったくない所で味わっています。孫娘は私に文書館に挨拶するように言います。私は喜んでその願いに応えます。私たちはよくキノコ採集に森の中へ行きます。天候が安定している時には遠方への素晴らしい眺望を楽しむことができます。それはそうとブリーストは思い違いをしていましたね。いずれにしても私はこの野原の広さを察知できますよ… ([...] ich jedenfalls sehe dem Feld ein Ende ab...)」(G13,781)。すなわち、この野原は、なるほど広いけれども、その広さは有限である（その広さを察知できる）から、「広すぎて論じ始めればなかなか決着がつかない」と言って、いつも問題解決を延期するブリーストの態度は誤りで、決着をつけることはできるのである。だからグラスは処理可能なこの野原を150年前に遡って掘り起こし、歴史の背後に埋もれたもの、すなわち「歴史の忘れられた側面」を白日の下に晒したのである。

グラスが掘り起こした „Feld“ は、ディーター・シュトルツが「この „Ein weites Feld“ の最終章である第37章は、『旧約聖書』の「エゼキエル書」の第37章へ通じている」⁽⁷⁾と指摘する通り、次のようなものである。「主の手が私の上に臨んだ。私は主の霊によって連れ出され、広い野原の真ん中に下ろされた ([...] und stellte mich mitten auf ein weites Feld)。

そこは死骸でいっぱいであった。主は私を至る所に連れて行った。見ると、野原の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それらはすっかり干からびていた。』⁽⁸⁾『広い野原』の最終章が『旧約聖書』の「エゼキエル書」の第37章へ通じるということに関しても、グラスは作中に仕掛けを入念に施しており、何もシュトルツの唐突な思いつきではない。「1962年の初め、壁の建設の直後、私たちの息子全員が西に留まり、私たちがマルタと3人きりになった時、私たちも犬を一匹飼ったわ。のろまだったわ。本当の都会の犬だった。しかし、ずるい奴だったわ。私のヴトゥケは犬を、私には何故かわからないけれど、いつも〈ヘゼーキエル〉と呼んだわ。もっと詳しく言えば、ベルリン人が呼ぶようにではなく、聖書の中に出てくるように〈ヘ・ゼ・キ・エル〉と呼んだのよ」(G13,455)というエミィの発言、何度も言及される「クロイツ新聞」のヘゼーキエルという名の編集者及び「文書館に欠落している37通の手紙」(G13,102)などがそれとなく作中に挿入されているのだ。グラスにとって干からびた死骸が無数に散乱している「野原」こそ「歴史の忘れられた側面」であり、この延長線上に信託公社によって情け容赦なく清算された何十万人もの失業者や自ら命を絶ったフロイントリヒ教授を代表とする多数のユダヤ人の犠牲者が存在しているのである。

VII 結び

『広い野原』は、「19世紀を体験した」フォンティが、「私にはどうしても大きい存在になろうとするこのような出来事は本当に少しも意味を持ちません」(G13,10f.)というベルリンの壁崩壊直後に抱いた見解の正当性が、通貨統合、再統一、信託公社の清算、フリードリヒ大王の遺骸のポツダムへの帰還と急転回していくおよそ1年10カ月の間に、現代ドイツの150年を「過現未」というグラスの第4の時間概念で時間を自在に飛び越えたり、過去を現在に溶解させたりしながら、「ドイツでは統一はいつも民主主義を台無しにする」(G13,55)から、過去及びポーランドとベトナム人を標的にした現在の暴力事件を引き合いに出し「ドイツでは何も変わ

っていない」(G13,500)を経て、「私は出て行かなくちゃ、立ち去らなくちゃ、遠くへ立ち去らなくちゃならないんだ。(…)すべてが私にこう言うのだ。《いつの時代にもブーヘンヴァルトがヴァイマルの近くにある国からは出て行く以外に何も無いのだ。この国はもはや私の国ではない、あるいは私の国であってはならない、(…)》」(G13,671)に至るまでに、歴史的にいかにも実証されうるかという試みの書である。このため再統一には1871年のドイツ統一、泡沫会社乱立時代を、コール連邦首相にはビスマルクを、フリードリヒ大王の遺骸のポツダムへの帰還にはカッテを呼び出し、この1年10カ月の歴史的出来事を相対化する。歴史の相対化のためグラスは、フォンティがお気に入りのルソー島がある、花と緑が茂り、小鳥がさえずるティーアガルテンの自然描写に際しても、ここで殺害されたローザ・ルクセンブルクやカール・リープクネヒトに言及することを忘れない。150年の歩みの中に現在の生き生きした事実としてビーアマンの市民権剥奪、湾岸戦争、リトアニアの独立運動、モスクワの反乱などが折り込まれ、「誰もが自分流に正しい。至る所に勝利者がいる。みんな神の名において殺人を犯す」(G13,558)という、経験豊富なフォンティだからこそ可能な「歴史的真理」が吐露される。フォンターネの作品、日記、手紙などを隈無く渉猟し、フォンターネに精通したグラスは、この主人公に「フォンターネ」風の雑談口調で語らせ、自由自在にフォンターネの資料から、就中手紙から多量に引用し、『エフィ・ブリースト』を当て擦る。フォンティの口癖は „kolossal“ (巨大な、どでかい、非常な、スゴイ)で、この語はフォンターネ風の表現として形容詞的にも副詞的にも用いられ、合計およそ40回発せられる。フォンティとホーフタラーによって現代ドイツの150年はいかようにも処理可能なフィールドとなる。たとえば、フォンティが書類を持って上下する旧帝国航空省の自動循環式エレベーターは、第三帝国時代にはゲーリング元帥が、ドイツ民主共和国時代にはウルブリヒト書記長が、再統一後は信託公社の長官が利用し、一つの建物の中でドイツ歴史の3つの時期が演じられるのであるが、この永遠に回帰するドイツ歴史における犯罪のアレゴリーとなっている自動循環式エレベータ

一も、そしてこのエレベーターが信託公社の1000回目の清算の祝典の際に火災に遭うのも、信託公社の初代長官が暗殺されたのも、そしてその暗殺犯として夫が清算によって失業した平凡な主婦に嫌疑がかかるのも、ドイツの長い歴史が辿り着いた必然的結果であるという風に文学的に虚構される。

フォンティは「その問題は広すぎて論じ始めたらなかなか決着がつかない」 („Es ist ein weites Feld.“) という、ブリストが問題解決を延期する慣用的表現を自家菜籠中のものとして必要に応じて作中至る所で用いてきた。このような問題解決を延期する、どっちつかずの曖昧な態度は、第一次世界大戦前、スイスのサナトリウムで7年間過ごした、『魔の山』のハンス・カストルプの態度に通じるものがある。この点、カストルプの態度に対するジェルジ・ルカーチの「無為に落ち込み、決断する力もなく、一方でセッテムブリーニに共鳴しながら、他方でナフタのデマゴギーに対してイデオロギー的に無防備であるというような、そういう敬うべき凡庸さというものは、歴史的な罪過となるのである」⁽⁹⁾という評言は、『広い野原』のフォンティに関しても正鵠を得ているように思われる。すなわち、この決断力のない問題解決を回避する曖昧なドイツ市民の態度が一このような態度の人々をグラスはこれまで状況共同構成者 (Mitläufer) として描いてきた一、結局はヒトラーの第三帝国とホロコースト、秘密警察国家東ドイツ、信託公社による悲劇などドイツの歴史的罪過を生み出した元凶ということになる。それ故、グラスは最後にフォンティにブリストを批判させて、その不決断な態度を撤回し、 „Es ist ein weites Feld.“ の „Feld“ が何であるか、多くの埋もれたものや忘れられたものを掘り起こしたのである。フォンティはセヴェンヌへ隠遁したが、読者はグラスが掘り起こした現代ドイツの150年の「歴史の忘れられた側面」と向き合わなければならないのである。

この「歴史の忘れられた側面」に向き合った時、マルセル・ライヒ＝ラニツキのように、『広い野原』を激しく非難する人々の理由の一つである、信託公社を初めとする西側のやり方ばかりが攻撃の対象とされているが、

旧東ドイツの、人々を弾圧し、多くの犠牲を強いたドイツ社会主義統一党の恐ろしさ、文学の抑圧及び反ユダヤ主義などには全然触れていない⁽¹⁰⁾ということも首肯し得るように思える。しかしながら、『『広い野原』を書かなかった』人は、自分の政治観、文学観に応じて何とでも批判することが可能なのだ。ヘーゲルの世界精神に反対する歴史の懐疑主義者である(Vgl.F,416) グラスにとっては、そのような国家の下で長い間犠牲を強いられ、再統一後は信託公社によってスクラップ同然に扱われる、傷ついた人々の視点に立って現在を描写することが肝心なことであった。彼は秘密警察国家旧東ドイツを容認しているわけではない。「私は犠牲者のベンチに坐ったので、勝者のベンチに坐ったものではありません」(F,456)。このためフォンティは常に現在に対して批判的言辞を弄し、「勝者の出来事の歴史」をその都度相対化していく。このグラスの歴史を見る姿勢は『ブリキの太鼓』から一貫しており、勝者の歴史が意識の中で習性化されている人々、あるいは無為に落ち込み現状に追従する人々に対して、旧東ドイツの企業、組織、その他諸々を情け容赦なく清算する信託公社などは突然成立したのではなく、長いドイツの歴史の中で必然的に生み出されたとする『広い野原』は、これまでの作品と同様に、政治に深く関わりながら文学作品として様式的に完成された啓蒙の書、あるいは警告の書となっている。

注

- (1) Günter Grass: *Ein weites Feld*. In: Günter Grass Werkausgabe. Hrsg. von Volker Neuhaus und Daniela Hermes. Göttingen 1997, Bd. 13. 以下本全集からの引用は本文中に G 記号と巻数の後に頁数を示した。
- (2) *Der Fall Fonty »Ein weites Feld« von Günter Grass im Spiegel der Kritik*. Hrsg. Oskar Negt, Göttingen 1996, S.51. 以下本書からの引用は本文中に F 記号の後に頁数を示した。
- (3) Volker Neuhaus: *Schreiben gegen die verstreichende Zeit*. München 1997, S. 225. 以下本書からの引用は本文中に N 記号の後に頁数を示した。

- (4) Hans Joachim Schädlich: *Tallhover*. Hamburg 1986.
- (5) Helmuth Kiesel: *Drei Ansichten des Wiedervereinigungsprozesses : Heiner Müller, Günter Grass, Volker Braun*. In: *Die Intellektuellen und die nationale Frage*. Hrsg. Gerd Langguth. Frankfurt/Main ; New York 1997, S.219.
- (6) Theodor Fontane: *Effi Briest*. In: Theodor Fontane Gesammelte Werke. Hrsg. von Peter Bramböck, München 1979. S.38. 以下本書からの引用は本文中に Th 記号と巻数の後に頁数を示した。
- (7) Vgl. Dieter Stolz: *Nomen est omen. „Ein weites Feld“ von Günter Grass*. In: *Zeitschrift für Germanistik*. Neue Folge 2. Peter Lang Verlag, 1997, S.327.
- (8) *Die Bibel*. Hrsg. von der Evangelischen Kirche in Deutschland. Deutsche Bibelgesellschaft, 1985, S.825f.
- (9) Georg Lukács: *Auf der Suche nach dem Bürger*. In: Georg Lukács Werke, Neuwied und Berlin 1964, Bd.7, S.528.
- (10) Vgl. Marcel Reich-Ranicki: *Ein Brief von Marcel Reich-Ranicki an Günter Grass zu dessen Roman „Ein weites Feld“*. In: *Der Spiegel*. Nr.34. 1995, S.169.